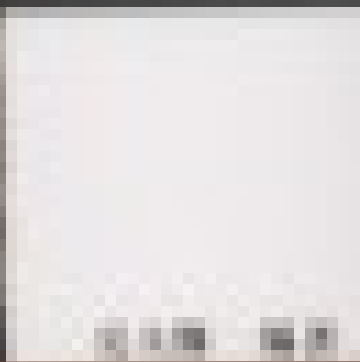


汉译日 翻译问题



吴大纲 编著

汉译日 翻译问题



汉译日翻译问题

吴大纲 编著



华东理工大学出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

汉译日翻译问题/吴大纲编著. — 上海: 华东理工大学出版社, 2009. 1
ISBN 978-7-5628-2451-0

I. 汉... II. 吴... III. ①日语-翻译-自学考试-教材 IV. H365.9

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2008)第 182868 号

汉译日翻译问题

编 著 / 吴大纲

策划编辑 / 王耀峰

责任编辑 / 常海霞

责任校对 / 张 波

封面设计 / 陆丽君

出版发行 / 华东理工大学出版社

地 址: 上海市梅陇路 130 号, 200237

电 话: (021)64250306(营销部)

(021)64252710(编辑室)

传 真: (021)64252707

网 址: www.hdlgpress.com.cn

印 刷 / 江苏句容市排印厂

开 本 / 890mm×1240mm 1/32

印 张 / 7.625

字 数 / 217 千字

版 次 / 2009 年 1 月第 1 版

印 次 / 2009 年 1 月第 1 次

印 数 / 1-5050 册

书 号 / ISBN 978-7-5628-2451-0/H·791

定 价 / 25.00 元

(本书如有印装质量问题,请到出版社营销部调换。)

编者的话

本教材由三大章构成。第一章序论着重谈翻译在外语学习中的地位,特别是中译日的性质特点,以及阻碍学习者进步的主要瓶颈。在中级以上水平的翻译实践中需要解决的问题,就中译日而言,首先要解决对日语表述的系统理解,而这种理解应该是建立在宏观上的理解,通俗地讲也就是要培养感觉。我们还通过实际译例来通俗地解释什么是直译?什么是意译?什么是误译?进而展示翻译的标准和一些具体技巧。

第二章本论着重谈两国语言的异同,相同的地方比较好办,不同的地方就是需要我们重点解决的地方。从类型语言学中对日文和中文的分类出发,落实到具体的本质性不同的表现形式,从而为构建翻译语法学添砖加瓦。这里分三大部分五个小节。第一部分主要谈日文和中文的不同表现在哪里;第二部分主要谈词与词的搭配问题,通过对动词范畴意义的分类,展现名词和动词的组合之间的各种意义结构。通过十个单元和一百道练习题的操练,以期得到某种感觉;第三部分主要谈句末的各种语气的归类,以及由于这种语气在中文表达上的绝对不对称而引起的困惑。特别列举中文中的“应该”一词在日语表达中可以有十多种译词的例子,让学习者提高对翻译深刻内涵的认识。

第三章是实践篇。在这一章里我们对各种文体进行了独到的分类,在四大类“寒暄表达”“商业通讯文表达”“新闻报刊表达”“文学作品表达”下面再分25类,特别是在“文学作品表达”里进一步分成九类。在这一章里,我们主要提供精选的实际素材和最棒的译文让广大学习者自己来细细品味。

最后,对华东理工大学出版社为本教材的出版所提供的帮助,表示诚挚的谢意。

编者

2008年9月于寓所沧浪楼

目 次

第一章 序論

- 一、翻訳とはなにか (1)
- 二、いい翻訳者になるためには (1)
- 三、いい訳文にするには (3)
- 四、直訳、意訳と誤訳 (6)
 - 1. 直訳と意訳 (7)
 - 2. 誤訳 (10)
 - 1) 内容の欠落と余分な訳 (10)
 - 2) 主語の間違い (12)
 - 3) 指示代名詞の指す内容の間違い (14)
 - 4) 動詞と対象語の関係 (16)
- 五、翻訳の一般的技法 (18)

第二章 本論

- 一、翻訳のための文法論 (22)
- 二、中日両語の文法上の根本的相違点 (22)
- 三、単語と単語の組み合わせ (24)
- 四、連語の認定 (29)
 - 1. 中国語における連語研究の歴史と現状 (31)
 - 2. 日本語における連語の特徴 (41)
 - 3. 日本語の連語構造の形 (44)
 - 4. 動詞の意味と連語的な構造 (46)
 - 5. 動詞の基本的な意味と派生的な意味 (52)
 - 6. 連語的な構造に縛られた動詞の意味 (57)

7. 連語的な構造を広げることと構造に縛られることとの違い (66)
8. 動詞の意味は名詞の性質と深く関わっている (69)
9. もの名詞を対象とする動詞とこと名詞を対象とする動詞 (72)
10. 動詞の意味の形象的な用法と主体の関係 (77)
11. いわゆる自他動詞と原則論 (82)
12. 動詞の意味と複雑な構造の内的関係 (88)
13. 動詞の意味と慣用句 (95)
- 五、文と陳述——述語の形式 (99)
 1. 文とは何か (99)
 2. モダリティといろいろな述語の形式 (109)
 3. 条件形や中止形を組み合わせて作る述語 (114)
 4. 連体形と形式名詞を組み合わせて作る述語 (120)
 5. 「应该」の訳 (138)

第三章 実践篇

- 一、「挨拶」の翻訳についての実際例 (142)
 1. 切り出し言葉についての実際例 (143)
 2. 感謝の意を表す言葉についての実際例 (146)
 3. 過去を振り返る言葉についての実際例 (148)
 4. 遺憾を表す言葉についての実際例 (150)
 5. 期待を表す言葉についての実際例 (152)
 6. 乾杯の言葉についての実際例 (153)
- 二、「商業通信文」の翻訳についての実際例 (155)
 1. 礼状についての実際例 (155)
 2. 中国より研修生派遣についての実際例 (156)
 3. 常駐代表機構設置についての実際例 (157)

4. 通知についての実際例……………	(159)
三、新聞記事の翻訳についての実際例……………	(161)
1. 国務院総理東南アジア諸国連合首脳会議出席に についての実際例……………	(161)
2. 各国の新聞界が人民日報社長を追悼についての 実際例……………	(165)
3. わが国臨床意義を持つ「中華骨髓バンク」の設立 についての実際例……………	(167)
4. 爬虫類の特大密輸事件についての実際例……………	(169)
5. 中日共同声明……………	(170)
四、文学作品の翻訳についての実際例……………	(174)
1. 雪の夜の街の描写文……………	(174)
2. からかう語調の文章……………	(176)
3. 追憶を表わす文章……………	(178)
4. 兄弟の間の会話……………	(180)
5. 女同士の会話……………	(185)
6. 恋人同士の会話(1)……………	(187)
7. 恋人同士の会話(2)……………	(191)
8. 威圧的な話し方……………	(195)
9. 男同士の会話……………	(197)
10. フロント係りと客との会話……………	(202)
附録 練習問題の参考訳……………	(207)
参考文献……………	(235)

第一章 序論

一、翻訳とはなにか

翻訳とは、日文中訳の場合は、日本の人の、日本語で考え、言ったり書いたりしたことを中国人のわたしなら、中国語でどう考え、言ったり書いたりするだろうかという、比例式的に解く作業である。それに対して、中文日訳の場合は、中国の人の、中国語で考え、言ったり書いたりしたことを、外国語としての日本語でどう考え、言ったり書いたりするだろうかという、比例式的に解く作業である、ということである。特に中文日訳の場合は、翻訳者の仕事としては、この日本人にどんなふうに日本語をしゃべらせようか表現しようかではなく、日本人ならこれを何と言うだろうか表現するだろうかを考えることだと思う。

翻訳には理論があるかどうかはさておき、翻訳者としての理念があるはずである。なによりもまず、原作者がその読者に与えたのと同じ効果を、翻訳者はその読者に与えなければならない、ということだろう。

こうして考えてみれば、翻訳というのは大変な作業だといわざるを得ない。

二、いい翻訳者になるためには

言うまでもなく、翻訳者はまず第一に、翻訳しようとする原文について相当な基礎力を持っていなければならない。母語だから

といって、基礎力の向上にたゆまぬ努力を怠ってはならない。外国語についての基礎力を有することを翻訳者の必要条件とすることには誰も異論はないだろう。しかし、自分の母語に磨きをかけ、レベルアップをはかることもきわめて重要であるということは、往々にしておろそかにされがちである。母語の水準が低ければ、それで書かれた文章の内容や風格、持ち味を正確に深く把握することができないので、翻訳のキーポイントである原文の「把握」に問題が生じ、それが訳文のよしあしに大きくひびいてくるのである。

第二に、日本語さらに日本に対して豊かな知識と生活体験を有することも、翻訳者にとって必要不可欠の条件である。日本語が少し分かれば、あとは辞書があれば翻訳ができと思っている人もいる。特に中国語と日本語の間の翻訳についてそういうような考え方をしている人が多い。中日両語ともに漢字を使っているのでお互いになんとなく分かるというのであるが、これはとんでもない間違いである。翻訳の対象となる内容は森羅万象、あらゆる分野、すべてのジャンルにわたっている。この点はほかの科目や専攻とまったく異なっており、翻訳者は関係語学以外は、狭くて深い知識よりも広くて豊かな知識が求められる。もちろん、ある特定の科学・技術分野の翻訳だけに従事する場合は、その分野に関する科学・技術の知識をかなり深く要求される。その場合でも、科学・技術が専門化・細分化とともに学際化・総合化の傾向を強めている今日では、その知識にある程度の広がり求められる。また、文学作品を翻訳する時には、その国の民族性や風習・生活様式も含めた豊かな知識と生活体験を必要とする。生活体験については、いちいちその国に行って直接に体験することはできないが、自分の生活体験を豊かにしておけば、自ずから共鳴する部分が生まれ、印象や感触によって間接的に生活体験をすることがで

きる。

また、翻訳にはそれなりの技法やテクニックがあって、それらを把握し駆使しなければ、翻訳はできないし、ましてやいい翻訳はできない。翻訳の技法やテクニックは翻訳の実践のなかで知らず知らずのうちに体得し、無意識のうちにそれを運用しているのである。その体得は人によって、とくにその人の翻訳実践の量と質によって、まちまちである。したがって、翻訳実践の量と質がものをいう場合が多い。もちろん先人の経験から学ぶことも大事である。

三、いい訳文にするには

言うまでもなく、翻訳の第一歩は原文を正しく完全に理解し把握することである。そのためには、原文についての基礎力が要求されるばかりでなく、種々さまざまな作業が必要になってくる。たとえば、ニュースや時事問題を翻訳する時にも、取りあげられている問題や事件の歴史的な流れや当時の社会的背景、さらには使われていることばの適確な意味内容などをよく調べなければならない。また、ビジネス関係の書類や科学・技術関係の論文を翻訳する場合にも、まず関連の状況や知識を頭に入れ、専門用語が分からなければ調べておく必要がある。文学作品の名作・大作を翻訳する場合、原作のモチーフや内容を把握するばかりでなく、作者の属する国や民族の文化や歴史・風習、原作の時代的背景、作者の思想的傾向や文筆的特徴、作者と作品に対する社会的評価などを調べる必要がある。

こうした原文の正しい完全な理解と把握が訳文のよしあしに決定的な影響をあたえるのであるが、この段階で特に避けるべき点が二つある。一つは、多分そうだろうという当て推量やいい加減

な態度である。もう一つは、全体の文脈を考えないで、一つの単語、一つの文節、一つのセンテンスの意味をバラバラにとらえることである。

翻訳の第二段階は、把握した原文をどのように訳文に表現するかという作業である。この段階では、もちろん訳文に使われる言語についての訳者のレベルと表現力が問われるのだが、そのほかに、翻訳に関係ある二つの言語の比較対照がきわめて重要である。いうまでもなく、第一の段階——原文の「把握」の段階においてすでに二つの言語の比較対照が行われているのであるが、しかしそれはそれほど意識的に行われているわけではないし、また意味の把握にポイントがおかれている。ところが、訳文への「表現」の段階になると、どうしても意識的に細かく二つの言語の比較対照を行わなければならない。単語一つをとってみてもそうである。原文の「把握」の段階で単語の意味を調べるために辞書を引く。一つの単語にいくつもの意味がある場合、原文の内容からまたは前後の関係から適当と思われる意味を一つだけ選ぶ。これで原文の「把握」はできるのだが、辞書から意味は分かるとしても、それが適訳だとは限らないので、訳文への「表現」の段階では、両言語の比較対照をして適訳を考え出さなければならない。また、翻訳は逐語訳ではないので、訳文への「表現」の必要から、一つの単語を二つ以上の単語で表現したり、逆に二つ以上の単語を一つのことばにまとめて表現する必要も生じてくる。これも二つの言語のきめ細かな比較対照を通じてはじめて可能になる。一つのセンテンスや文章のひとつくだりになると、さらに、二つの言語の文法・構文法・表現法のちがいから発想や習慣のちがいまで比較対照して訳文への「表現」を考えなければならない。

ここでは実際例をひとつあげて、いい訳文にするにはどうすべきかを考えてみよう。

魯迅の小説『孔乙己』に次のようなくだりがある。

孔乙己一到店、所有喝酒的人便都看他笑、有的叫道、“孔乙己、你脸上又添了新伤疤了！”他不回答、对柜里说、“温两碗酒、要一碟茴香豆。”便排出九文大钱。

その日本語訳として、次の二つの訳文をつくって比較してみよう。

訳1：孔乙己が店にくると、そこに居合わせた酒を飯んでいる客たちは、みんな彼を見て笑うのである。あるものはこういう。「孔乙己、お前の顔にまた新しい傷痕がふえたな！」彼は返事もせずに、スタンドの内側に向っていう。「二杯温めてくれ。茴香豆も一皿もらおう」。そして九文そこへならべた。

訳2：孔乙己が店へ顔を出すと、一杯やっていた連中が、みんなで彼をからかう。ひとりが「孔乙己、お前の顔に、また新しい傷がふえたな！」と大声で話しかける。孔乙己は相手にしないで、カウンターに向って「二本つけてくれ。それから豆を一皿」と言うと、銅貨を九文並べた。

訳文の1と2を比べてみると、2の方がよい。このくだりは、落ちぶれてみんなから馬鹿にされていながらプライドを棄て切れない孔乙己の内心の虚しさを描いているのだが、訳2のほうがその雰囲気をよく表わしている。たとえば、“所有喝酒的人便都看他笑”を訳1では「みんな彼を見て笑う」と訳しているが、「みんなで彼をからかう」と訳した訳2のほうが孔乙己のあわれなさがよく出ている。また、“有人叫道、……”も「あるものはこういう」(訳1)と

訳すよりも「ひとりが『……』と大声で話しかける」(訳2)としたほうが賑やかな居酒屋の雰囲気にあふさわしい。それから“温两碗酒，要一碟茴香豆”は「二杯温めてくれ。茴香豆も一皿もらおう」(訳1)とするよりも「二本つけてくれ。それから豆を一皿」(訳2)と訳したほうが、日本の読者には居酒屋でのオーダーとして分かりやすく親しみやすい感じがするのではないだろうか。また“排出九文大钱”を「九文そこへならべる」(訳1)と直訳したのでは銅貨なのか紙幣なのかよく分からないので、やはり「銅貨を九文並べた」(訳2)とはっきり「銅貨」を訳文に出したほうが分かりやすいと思う。

このように、いい訳文、適訳にするには、原作の意味内容ばかりでなくその場の様子や雰囲気もどうしたら訳文によく表現できるかに心をくだき、さらに、訳文の読者に分かりやすくて親しめる表現をできるだけ使うよう心がける必要がある。

こうした工夫は日本の読者には親しみやすいというのは確かである。中国人にしては日本通でなければここまでやれることはないだろう。しかしながら、もう少し突っ込んで考えると、日本の酒場とは違いあるはずの中国の酒場ならではの雰囲気を犠牲にしてしまう恐れがある、ということも否めない。もちろん、上級の問題だが、この親しみやすさをどの程度求めればよいかなど、翻訳の難しさもここにある。

四、直訳、意訳と誤訳

「直訳」とはなにか、「意訳」とはなにかという定義づけをはっきりさせなければならない。「直訳」を関係する両言語の構造や表現のちがいにおかまいなしに「逐字訳」または「逐語訳」することと理解するなら、「直訳」にはノーの答えを出さざるをえない。また「意

訳」を原文にこだわらずに「大体の意味をとって適当に訳す」と理解しているのであれば、この「意識」にもノーの答えを出さざるをえない。

「直訳」と「意識」を正しく定義づけたとしても、関係する両言語のちがいの程度いかんによって、直訳的手法と意識的手法のどちらを多く使うかがちがってくる。しかも、それは翻訳する文章の部分によってちがいがあり、ケース・バイ・ケースで処理しなければならない。

ジャンル別にもかなりちがいがある。たとえば、科学技術関係の論文は、どちらかという直訳的手法をより多く用いた方がよく、文学作品は意識的手法をかなり用いないと、いい訳文にはならない。

ここではまた実際例をいくつかあげて、「直訳」と「意識」、さらに「誤訳」との違いを考えてみよう。

1. 直訳と意識

実際の必要に応じて、直訳的手法を使ったり意識的手法を使ったりする。どちらが良いかと判断しがたい場合もある。たとえば、

- ① 祥子は乡下人，口齿没城里人那么灵便；设若口齿灵利是出于天才，他天生来的不愿多说话，所以也不愿学着城里人的贫嘴恶舌。

直訳 祥子は田舎もので、町の間みたいになべらべらしゃべる舌を持ち合わせていなかった。べらべらしゃべるということは先天的なものだとしたら、彼は生まれつき口が重いほうだったので、町の間みの薄っぺらなおしゃべりなどを真似しようとも思わなかった。

意識 祥子は田舎もので、都会の人たちのように口上手ではな

かった。おまけに生来無口ときているからいっそう始末が悪い。

直訳のほうは、中国語文の意味をかなりまともな日本語で忠実に訳しだすところが高く評価されるだろうと思うのだが、意識のほうも負けてはいない。日本語の慣用的な表現をこのように使いこなせたので、簡潔さからすれば、むしろこちらのほうが一枚上だといえるかもしれない。

② 仿佛是说只要把小小的家庭整理得美好,那么社会怎样满可以随便。

直訳 各個人がその小さな家庭内を立派に治めて行きさえすれば、社会がどうなろうとかまわないんだといっているかのようであった。

意訳 各個人がその小さな家庭内を立派に治めて行きさえすれば、社会は期せずしてよくなるものと信じているかのようであった。

一見して、両方の訳にかなりの違いが出ているのではないかと感じるかもしれないが、直訳のほうはもちろん問題ないと思うけれど、意識のほうも字面の意味を通してかなり似通った意味合いのことを述べているのだと感ぜられる。

③ 当仆人去,不在行;伺候人,不会;洗衣服做饭,不会!什么也不会,……

直訳 下男勤めはまったく勝手はわからないし、茶店のボーイという柄でもなし、洗濯もできなければ飯も炊けない。まったく何一つできない。

意識 下男にでもやろうか、その勝手がわからない、つまり人仕えはできない。洗濯や飯炊きもできない。おれにはなにひとつできない。

意識 いっそ下男にでもなろうか、人仕はどうだろう、飯炊きは？洗濯は？次から次へと仕事を思い浮かべ、そのたびにかぶりを振った。だめだ。おれにはなにもできない。

この三つの中で、どちらがよいかという問いには満足な答えをおそらく出しにくいだろう。直訳のほうは“伺候人”を「茶店のボーイ」と理解しているのに対して、二番の訳のほうは「つまり」を加えて「下男」という仕事と理解している。“；”の訳を考えれば、意識のほうが良いかもしれない。こういった戸惑いを無くした訳は三番の意識である。

④ 愚蠢与残忍是这里的一些现象；所以愚蠢，所以残忍，却另有原因。

直訳 無智と悲惨。それはこの界限ではごく普通の現象なのだ。そして、無智と悲惨とは、その由ってくるべき原因は別にあるのだ。

意識 無知と残忍、それはこうした長屋でのひとつの現象に過ぎない。なぜ無知なのか、なぜ残忍なのか、原因は別にあるのだ。

意識 無知と残忍、それはこうした長屋につき物である。だが、彼らがなぜ無知であり、なぜ残忍であるのかその原因に目をつぶって彼らを責めるだけでは、意味がないだろう。

この直訳を標準訳にしてみても、何か意味的につけ加えている二つの意識のほうもけっして理解の過ちがあるわけではないだろう。